大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ジラフがキリンと呼ばれた理由：中国の場合、日本の場合(麒麟を巡る名物学 その一)(平木康平教授退職記念号)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 湯城, 吉信
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004459

ジラフがキリンと呼ばれた理由

―中国の場合、日本の場合（麒麟を巡る名物学　その一）

湯城吉信

はじめに

二〇〇五年八月、ケニアから中国にジラフが贈られた。これは、六〇〇年前の明代の鄭和の大遠征の際、ジラフが「麒麟」と呼ばれて永楽帝に贈られた故事にちなんだものである。中国（中華人民共和国）は建国以来一貫してアフリカ外交を重視してきた。鄭和の故事は、ヨーロッパ列強のアフリカ侵略に先立ち、中国がアフリカと友好的外交関係を結んでいたことを物語る格好の例として珍重されるのである。ところで、現在、ジラフは中国では「長頸鹿（チャンチンルー）」と呼ばれており、「麒麟（中国語での発音は「チーリン」）」とは呼ばれていない。一方、日本ではご存じのように「麒麟（キリン）」と呼ばれている。これはなぜなのだろうか。

麒麟は、元来、龍などと同じく中国の想像上の動物（聖獣）である。体は鹿、尾は牛、額は狼のようで、角は一本だとされる。麒麟麦酒株式会社の商標に見えるあの麒麟である（〔図1〕）。麒麟麦酒の麒麟[1]を見るとかなりグロテスクで獰猛な感じがするが、実は性質はおだやかで、皇帝が善政を行う場合に現れる瑞獣とされる。龍、鳳凰、亀とともに瑞獣の代表（四獣）とされている。古代の聖人黄帝の時代には、鳳凰が庭で羽ばたき、麒麟が郊外で見られ、青龍が車を引いていたと言われる（『淮南子』「覧冥訓」）。この両者を目にして、我々はその違いに途惑わざるを得ない。麒麟とジラフはかくも似つかぬものなのに、なぜ、ジラフに麒麟の名が当てられたのか。

日本で、ジラフが「キリン」と呼ばれているのは、上記の「麒麟」に由来するものであることは言を俟たない。だが、現在、中国では、ジラフは「長頸鹿（チャンチンルー）」とまさに名は体を表す名前で呼ばれている。麒麟の発祥地である中国で「麒麟」の名が消え、一方、日本で「キリン」と呼ばれているのはなぜか。本稿では、対

象物と名称との関係を探る名物学[2]の観点から、中国と日本でジラフが麒麟と呼ばれた経緯をたどってみたい。紙幅の関係上、中国については概略にとどめ、日本を中心に述べたい。

一　中国の場合

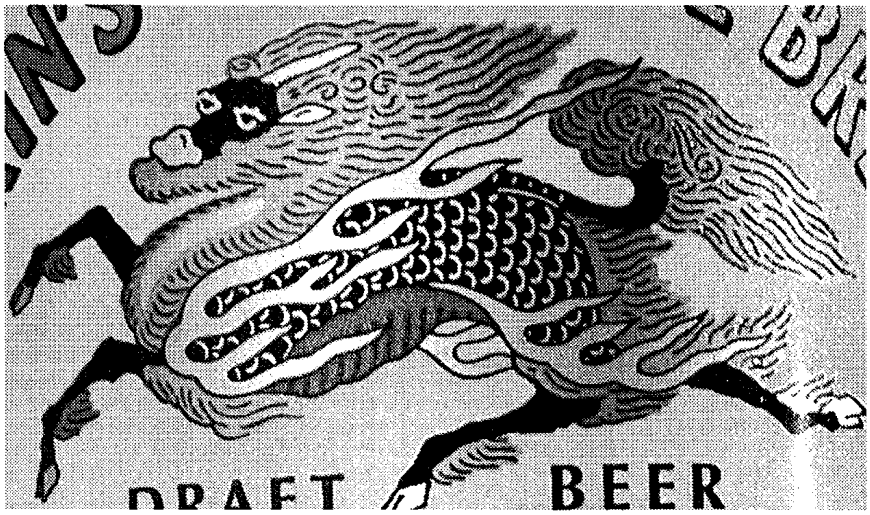

図1　麒麟麦酒株式会社商標

本章では、中国における麒麟とジラフとの関係を述べたい。

麒麟は国家によって認定される

「はじめに」で述べたように、鄭和の遠征の際、アフリカからジラフが献じられた際に麒麟と呼ばれた[3]。だが、中国でジラフが麒麟と呼ばれたことがはっきり確認できるのはこの時だけである。それ以前も、それ以後（清代）も、ジラフらしき動物は現地音（音訳）で表現されている。明代にも「麒麟」という名称とともに現地音が並記されている場合もある[4]。ジラフの現地音が「麒麟」の発音に近かったので麒麟という名が当てられたのであろうという説がある[5]が正しくなかろう。後述のように、麒麟と呼ぶかどうかは中国を主体とした国家レベルでの認定問題であり、外国の発音によって決定すべき問題ではないからである。

なお、明代、中国から周辺諸国への下賜品の衣服には多く麒麟の模様が用いられた[6]。『明史』「輿服志」によれば、麒麟紋の着物は、四、五品の臣下の服と規定されている。周辺民族が麒麟服を与えられることはそれと同等の位を認定されたことを表すものであろう。「皇帝陛下の善政のお陰で瑞獣が出現しました」と麒麟（ジラフ）を献上し、その見返りに麒麟服を授かるという図式があったのは興味深い。ジラフを麒麟と呼んだのは、宦官による胡麻すりから出た智慧だという説は的を射ていると言えよう[7]。

麒麟と実在動物との関係

唐代以前、どのような実在動物が麒麟と呼ばれたかははっきりし

ない。王充や郭樸の記述を見ると、鹿、牛、馬の類が麒麟と見られたらしいことが窺える程度である[8]。唐代以前の史書で目立つのは、いかにも記号的な瑞獣としての麒麟の記述である[9]。

だが、宋代以降は記述に現実味を増す。注目すべきは、宋元の時代には、牛の奇形が麒麟と認知されることが多かったらしいことである[10]。また、宋代には、ベトナムから犀が麒麟として献上されたことがあった。その時、司馬光ら（田況が中心）の諫めにより、麒麟の名を認めず、「異獣」と呼ばれた[11]。

司馬光は以下のように言う。献上された異獣（犀）がもし麒麟であったとしても、中国に出現したものではなく、異国から無理矢理に連れて来られたもので、中国の瑞とすべきではない。また、麒麟でなければ、ただ異国の笑いとなるだけだ。いずれにせよ、これを麒麟と認定することは宋朝の威光を発揚するものではない。いたずらにこのようなものを弄ぶより、賢者の登用など内政に勉めるべきだ、と[12]。

これと対照的に、明代にジラフが献上された時には、群臣がこぞって麒麟の出現を頌える賦を書いている[13]。宋代の司馬光の時とは、極めて対照的な状況であったことがわかろう。

以上の話から窺えるのは、一つは、中国人にとっても麒麟が非常にわかりにくい動物であったこと、もう一つは、麒麟は国家的認定を俟つ極めて人間的問題であったことである。麒麟は人間意識・社会状況を反映したまさに想像動物であると言える。今、鄭和の麒麟を引き合いにジラフが中国に贈られるのは、明朝による国家繁栄の自画自賛的誇示を想起させて興味深い[14]。

二　日本の場合

本章では、日本でジラフがキリンと呼ばれるようになったことについて述べたい。

キリンは石川千代松の命名か？

ジラフの日本初登場は、明治四〇年、上野動物園においてである[15]。

この時ジラフはキリンと呼ばれていたことは、種々の記録から確認できる[16]。そして、そのキリンという名前を付けたのは、一般には上野動物園館長の石川千代松であったとされている[17]。

だが、ジラフを麒麟と呼ぶことは石川に始まったことではない。以下、江戸時代から石川に至るまでのジラフを巡る名物学を概観してみたい。

ジラフ・麒麟説の濫觴—桂川国瑞

ジラフに麒麟を当てることは江戸時代に遡ることができる。

すでに寛政初年頃（後の「森島中良『蛮語箋』」を参照されたい）、桂川甫周国瑞（くにあきら）（一七五一—一八〇九）がジラフの図を描いていた。模様は網目模様ではなく豹のように水玉状で、体つきは実際のジラフより太めで後ろ足がかなり短いが、これが日本における最初のジラフ図であろうと言われる[18]（図2）。この図は、後述するように、おそらくは、ヨンストン『動物誌』を参考にしたものである（模様以外は一致する）。なお、この図には以下のような題辞がある。（　）内は、注及び国会図書館『動物写生図』との校異を示した。

図2　桂川国瑞麒麟図

（『日本博物学事始—描かれた自然Ⅰ』（サントリー美術館、1987）より）

＊基本的には、図3のヨンストンの図に似る。ただし、模様は「豹」模様に改めている。豹皮は江戸時代にも日本に将来されており、桂川も知っていたのであろう（日本への豹皮の渡来については、梶島孝雄『資料日本動物史』（八坂書房、1997）599頁が詳しい）。

『瀛涯勝覧』「阿丹（＊アデン）土産麒麟、前足高九尺餘、後足六尺餘、項長、頭昂、至一丈六尺、傍耳生二短肉角、牛尾鹿身食粟豆餅餌」。又『五雑組（＊国会本「俎」）』「永楽中曽獲麒麟、命工図画伝賜大臣。余嘗於一故家、得見之。其身全似鹿、但頸甚長。可四尺耳。所謂麞身牛尾馬蹄者、近之」。余偶閲西土某『喝叭咈喇（＊は今のケープタウン辺り）産物志』云「伎剌巴、状似駝、豹文、馬類、鹿身、牛蹄、其尾亦如牛。自頭至尾、長一丈七八尺。其頸甚長、自項至背有鬣如馬。昂頭高一丈五六尺。前足高殆倍後足。傍耳二短角、長六寸許。向前挺出、堅実如鹿角、而帯皮、生黒（＊国会本「墨」）毛。頸上一肉瘤、突起二寸許。遽見之、如三角者。性極馴良、産亜弗利加洲黒地兀皮（＊国会本「皮」なし）亜（＊エチオピア）及讃入抜爾（＊ザンジバル）等之処。或云、亜細亜洲印度地方亦有之」。按伎剌

巴、形状与前二説吻合。且角上帯皮生毛、又謂有肉瘤如角。則漢人所謂肉角者、或是乎。因摹其図、訳其説、以配印度鶏。若夫西狩所獲、元和所献、不知果為何状也。　月池桂国瑞題

＊ケープタウン、エチオピア、ザンジバルは『宛字外来語辞典』（柏書房）による。

ここでは、中国の『瀛涯勝覧』『五雑組（五雑俎）』に見える麒麟の記述と洋書の『喝叭咘喇（＊は今のケープタウン辺り）産物志』の「伎剌巴（ギラハ＝ジラフ）」の記述とが一致するとして、麒麟とは実はジラフのことであろうと同定する。

『瀛涯勝覧』は明の馬歓撰、鄭和の遠征の際の諸国見聞録である[19]。『五雑組（五雑俎）』は、明の謝肇?撰、天地人物事の五類に分けて雑多な記録を収録した書物で、和刻本も出版され我が国で広く読まれた。その巻九に、宋代の犀の献上の話とともに、上記引用内容が見える（末尾に「与今俗所画迥不類也」とある）。『瀛涯勝覧』と『五雑組（五雑俎）』の引用部は言うまでもなくアフリカから献上されたジラフを指しており、国瑞の推測は的を射たものである。

「一　中国の場合」で述べたように、中国でジラフが麒麟と呼ばれたのは明代に限定的な現象であったが、これについても国瑞は「有名な『西に狩りして獲た』麒麟や元和年間に献上された麒麟はどのようだったのだろう（若夫西狩所獲、元和所献、不知果為何状也）」[20]と、歴代の麒麟については考察の余地を残している。『喝叭咘喇（カハプラ）産物志』は未詳であるが、「ヨーロッパの某（西土某）」著とあるので洋書であることは間違いないであろう。将軍家に仕える幕府奥医師であった桂川家は、蘭学書を自由に読むことが許されていた。国瑞の麒麟図は、漢籍と洋書両者の該博な知識により始めて実現したものだと言えよう。

大槻玄沢の説―麒麟聖獣説の否定

次に、蘭学者大槻玄沢の著書『蘭畹摘芳』（写本）を見てみたい。同書には「麟鳳」（一七九一、寛政三年）と題する文章があり、麒麟について詳しく述べている[21]。

広く知られたものではないので、以下「麟鳳」の部分を抄出して解説を加えたい。傍線は湯城によるもので、特に注目すべき部分を示した。（＊…）も湯城によるもので、注または杏雨書屋本との校異である。

麟鳳

自古謂麟鳳為王者之祥、世不恒有、有聖代必出之。古今史籍

不絶書（＊杏雨本「盡」）而未有詳説。其物者窃惟是諸種不必当其世出之。恐後人賛（＊杏雨本「替」）聖王之徳輝欲奇其事、仮説以為出此霊鳥仁獣乎。往年、社友中川攀卿之在世、渉猟蘭書之際、閲容私東斯者所撰『禽獣譜』、見其鶏品中有称互留斯、印度鳩斯密拉弼里斯（此翻曰異状印度鶏）者、形状似所謂鳳凰者。就読其説、則為印度地方之産。因謂『呂氏春秋』（＊巻一四「孝行覧」「本味」）曰「流沙之西、丹山之南、有鳳鳥之卵、沃民所食」。則所産之地、不以為異者、即是也乎。廻摸其図…

又医官月池君読『瀛海勝覧』『五雑組』所載曰「麒麟、前足高、後足短、項長、頭昂、傍耳生二短肉角」「古所謂麕身牛尾馬蹄者近之。与今俗所画迥不類」之説、以与彼『禽獣譜』所図疑拉法者甚相似。欲読其説審其実而未果。余頃日投閑（＊杏雨本「閉」）偶取其書考索其事、則図説明覈、益知与二書之説脗合矣。因按自古謂麒麟者蓋表聖王之美徳所仮設耳、而二書所説者、乃真麒麟、為此疑拉法、不復容疑。由是観之、麟鳳二物俱異邦所産、不必俟聖者而出。顧上世聖王巨沢洋溢于異域、其人仰徳慕化、各執壌奠（＊貢ぎ物のこと）互輸遠物貢此等珍禽奇獣。猶「越裳（＊「裳」のはず）氏重九訳而献白雉」（注a）者、未可知也。友人曾煥卿精于赭鞭（＊薬のこと）之業、一日来訪余談次及此、且問漢人諸説。煥卿喜此挙、踊躍不已、為纂集経伝書史所載説渉麟鳳者見贈。因継攀卿及月池君之意、作為此編、列漢説及旧図於前、載訳文及真図於後、以備攷証云爾。

寛政辛亥（＊三年、一七九一）春、後学、仙台大槻茂質識。

（注a）『後漢書』巻八六「南蛮伝」他諸書に、周公が太平を実現し、交阯（ベトナム）の南の越裳氏が白雉を献上した話がある。

この後に麒麟に関する文献の引用が列挙されている。引用書は、史書以外に、緯書や明・朱国楨撰『湧幢小品』、明・田藝衡撰『留青日札』、清・王士禎『池北偶談』などの筆記類まで幅広い。

また、巻二末尾には、「疑拉法　容私東所載。按『五雑組』『瀛海勝覧』所載麒麟、是也」として、洋書に見えるジラフの記述を漢文訳している。その後に、内閣文庫所蔵本では「麒麟図」と書いた頁があるが、図は見えない。

「麟鳳」では、蘭方医中川淳庵（一七三九―一七八六）（名は鱗、字は攀卿）の鳳凰説と桂川甫周（名は国瑞、号は月池）の麒麟説とを敷衍している。前者については、インドの実在の鳥が鳳凰であるとし、それは中国古典の『呂氏春秋』の記述とも一致するという。後者は、すでに述べた内容であるが、比較する洋書はオランダ渡来のヨンストンの『動物誌』[22]中の「ギラファ（疑拉法）」（〔図3〕）に似ていることから、麒麟はジラフであると同定する。そして、ジ

ラフの特徴は伝説上の麒麟の特徴と一致する（「近之」）という『五雑組』の説を継承し、麒麟は王の美徳に応じて出現するものではなく、異国に常時存在するものだとして、中国の瑞獣説を否定する。「漢説及び旧図を前に列し、訳文及び真図を後に載す（列漢説及旧図於前、載訳文及真図於後）」と言うように、従来の想像動物の麒麟の姿と真の麒麟であるジラフの図とを列挙し、前者を否定し後者を推奨するものであったことがわかる（筆者の見た写本には図はなかった）。蘭書により漢籍を正すという蘭学者のスタイルに沿った言説であると言えよう。

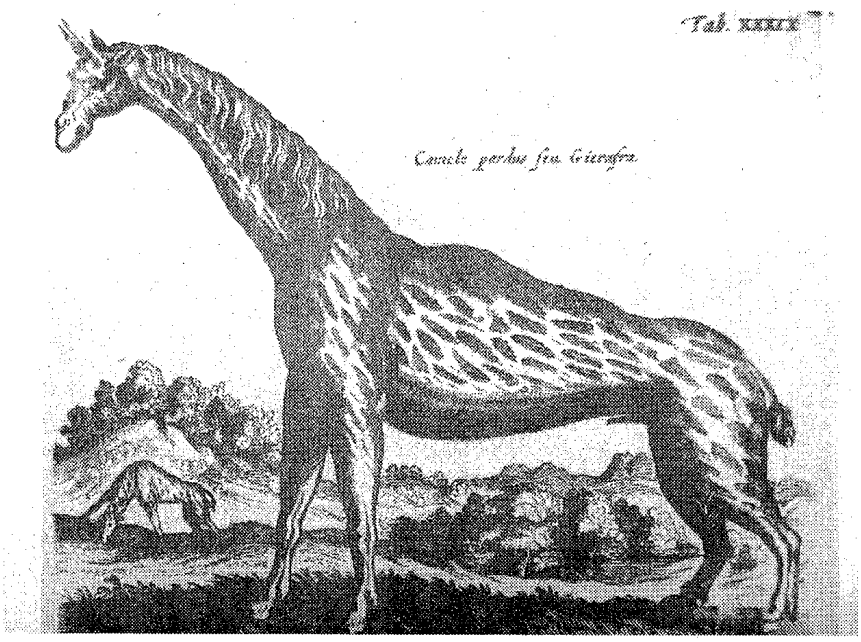

図3　ヨンストンジラフ図
（木村陽二郎監修『ヨンストン『動物図説』図版集成』（科学書院＜図像学叢書一＞、1993）より）

ここでは、古代の麒麟に考察の余地を残す桂川国瑞とは違い、麒麟はジラフであると断定している。この説が日本においてジラフに麒麟を当てることの淵源だとすれば、日本のキリンは中国古来の伝説動物の麒麟ではなく、換骨奪胎された脱漢入欧の麒麟であると言えるかもしれない。あるいは、日本人の中国から西洋への乗り換えを反映すると言えるかもしれない[23]。また、時代は降るが、明治になって西周らが西洋の概念を中国の古典語を使って訳したことに通じるかもしれない。

森島中良『蛮語箋』での「麒麟」の採用

麒麟ジラフ説はどのように広がっていったのであろうか。

蘭学者の中では、上記の桂川国瑞とそれを敷衍した大槻玄沢の説は知られていたであろうが、ともに刊行されたものではなかった（大槻の説は、刊行された『蘭畹摘芳』ではなく、写本『蘭畹摘芳』に見える）。刊行されたものでは、森島中良の『蛮語箋』（『類聚紅

毛語釈』の改題本、寛政十年、一七九八）の「獣」の中に次のようにある（図4）。

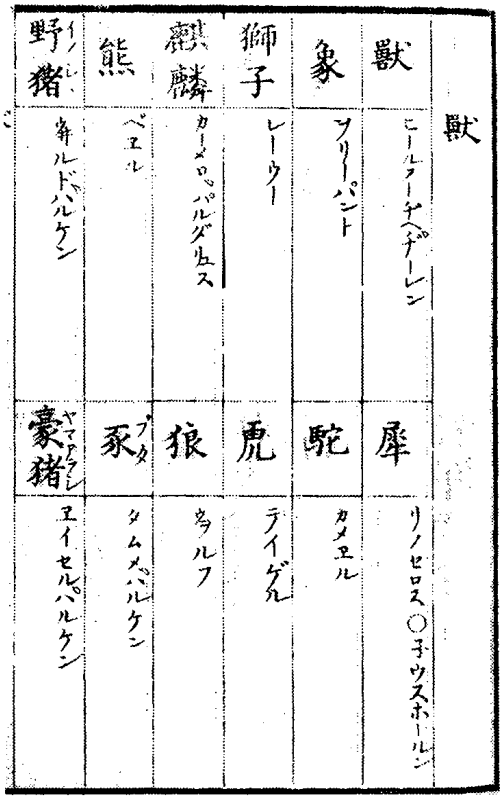

図4　『蛮語箋』
（早稲田大学図書館HP古典籍総合データベースより）

麒麟　カーメロ、パルダリュス

森島中良は、桂川国瑞の実弟である。『蛮語箋』は日本人がはじめてヨーロッパ語（阿蘭陀語）を日本語と対訳して公刊した小辞典であり、当時非常に流布した[24]。ジラフを麒麟と呼ぶことにも、この『蛮語箋』が一役買っているかもしれない。

ちなみに、森島中良には海外事情を記した『紅毛雑話』（天明七年、一七八七）という書物もある。同書ではライオンやワニ（カイマン）それに前述の鳳凰も登場するにも関わらず、ジラフは見えない。中良がジラフのことを知っていたら、当然それも加えたであろう。以上からすると、国瑞が「麒麟図」を書いたのは天明七年（一七八七）から寛政十年（一七九八）年の間だと推測できる。また、大槻玄沢が「鱗鳳」を書いたのは寛政三年であるので、「麒麟図」は寛政初年頃の完成であると推定できよう。

ちなみに、『紅毛雑話』巻一に「北海の大魚」という項がある。その冒頭は「北冥に魚あり、其名を「ミコラコスニュス」といふ」と始まる。「北冥に魚あり」は『荘子』巻一「逍遙遊篇」冒頭の有名な文句である。鳳凰と言い、麒麟と言い、「北冥大魚」と言い、中国古典に見える不可思議な動物と実在の奇獣を結びつける風潮があったのであろう。

〔附記〕以上の森島中良の件については磯野直秀先生からご教示いただいた。

幕末から明治期にかけてのジラフの訳語

現在、ジラフをキリンと呼ぶことは、以上に述べた蘭学者の説に淵源すると言えよう。ただ、これによって、ジラフを麒麟と呼ぶことが確定したわけではない。

ベルトルト・ラウファー『キリン伝来考』（博品社、一九九二、

原書は一九二七）には「日本人は、キリンを豹駝《ヒョウ＝ラクダ》、あるいはキリン（中国の麒麟と同じ）と呼ぶ」（六三頁）とある。ジラフには、「豹駝」という訳語もあり、麒麟とともに用いられていた。以下、幕末から明治期におけるジラフの訳語を巡る言説を追ってみたい。

伊藤圭介の説

伊藤圭介は、幕末・明治初期の有名な本草学者である。彼の『佛蘭西獣図訳名』[25]に、以下のようにある。

ヂラフ　豹駝　地球説略　之猟猟　博物新編

又或説ニ麒麟ニ当ル説アリ

ここでは、「豹駝」を筆頭に、音訳の「ギラヘ」と「麒麟」という三説が挙げられている。「豹駝」が筆頭に挙げられているのは、おそらく伊藤圭介がそれを第一候補と考えていたからであろう。なお、『地球説略』と『博物新編』とは、ともに英米人の書いた本であり、桂川国瑞や大槻玄沢らが、博く漢籍に取材していたのとは様相が違う[26]。

田中芳男による訳語の列挙

さて、次に伊藤圭介の弟子の博物学者、田中芳男について述べたい。

田中芳男（一八三八―一九一六）は、東京国立博物館・東京都恩賜上野動物園・博物局に勤務し、日本の博物館制度の確立に貢献した人物である。信濃国飯田で生まれ、のち名古屋の伊藤圭介に入門し、本草学を学び、後に博覧会や博物館に発展していく「本草会」「薬品会」を経験する。文久元年（一八六一）、芳男は圭介に伴われ、幕府の洋学研究機関「蕃書調所」の一施設「物産所」勤務のため江戸に移り、慶応三年（一八六七）には、万国博覧会のためパリに赴いている[27]。

田中は、明治九年にアメリカフィラデルフィア博覧会に赴き、剥製のジラフを交換して持ち帰った。この剥製のジラフは、明治十五年には上野動物園内の博物館でも展示された[28]。

以上のように、田中芳男は明治初期における博物学の重鎮であった。

この田中芳男に『泰西訓蒙図解』（明治四年）という著作がある。西欧諸国の文物を二二門に分けて紹介した本で、原本は田中芳男が

慶応二年のパリ万博の際持ち帰ったものという[29]。その下巻の「giraffe」の訳では、以下のように「長頸鹿」を含む三つが挙げられている（七葉表）（〔図5〕）。

図5　『泰西訓蒙図解』
（大阪府立中央図書館蔵本より）

麒麟　海国図誌　豹駝　地球説略　長頸鹿　智環啓蒙

ここにある『海国図誌』（一八四二）は魏源作の地理書である。我が国でも一八五四年以後逐次刊行され、佐久間象山などへ影響を与えたことで有名である。同書の巻二四「西印度西阿丹国沿革」では確かにジラフを麒麟と呼んでいるが、『明史』や『瀛涯勝覧』の引用部分である。『地球説略』（一八五六）は、「伊藤圭介の説」でも述べたようにアメリカ人のウェイ著の地理書である。『智環啓蒙』（一八五六）は、英語の啓蒙書の漢訳本で、日本でも広く読まれた[30]。つまり、伊藤圭介同様、田中芳男の引用書はいずれも新刊の中国書である。ただし、「麒麟」は英米人の著作の訳本の中から拾うことはできなかったので、中国人の魏源著の『海国図誌』を引くことになったのであろう。ただし、前述のように『海国図誌』の該当部分は『明史』や『瀛涯勝覧』の引用部分であり、田中には古典を精察する姿勢はなく、ただ訳語を拾うのが目的であったことがわかる。

次に、日本で最初に書名に「動物学」と題したことで有名な田中芳男訳纂、久保弘道校訂、中島仰山図画『動物学　初編　哺乳類』下（明治八年）「双蹄類」には「麒麟属」が立てられ、図の横に以下のようにある（一七葉裏）[31]（〔図6〕）。

図6　『動物学 初編』
（青木国夫他編『江戸科学古典叢書』34（恒和出版、1982）（影印版）より）
＊（注26）の『博物新編』の図に類似する。あるいはその転写か。

麒麟（キリン）　又豹駝　地理全志

『地理全志』（一八五四）は、イギリス人宣教師慕維廉（ウィルレム）著の地理書である。私が中之島図書館本（364/22）（爽快楼、安政五年（一八五八））で調べたところ、「豹駝」という語は見つからなかった。私の調査ミスでなければ、田中芳男の記述ミスだということになる。なお、同書明治八年序には、次のようにある。

訳字ノ如キハ漢訳素ヨリ少ク、且偶アリト雖ドモ穏当ナラザルハ取ルコトナシ。故ニ今新ニ訳字ヲ製セザルヲ得ズ。杜撰臆想ノ罪遁レ難シト雖ドモ、新字ヲ填メザレバ解ヲ為シ難ク、已ムヲ得ザルニ出レバナリ。

田中の訳出の苦労が窺えよう。ちなみに、田中芳男『動物学』とともに草創期の動物学の成果として有名な太田美濃里筆記『斯魯斯氏講義動物学　初編』（明治七年）は、全篇洋名のみである。初編上三四葉裏の「ヘラフェ」がジラフのことであろう[32]。これによっても、田中芳男が、明治期において動物名を訳した最初の人物であったことが確認できよう。

「キリン」を決定づけた田中芳男「獣類一覧」

ジラフをキリンと呼ぶことの定着に大きな影響力を持ったと考えられるのは、「文部省新刊小学懸図」の田中芳男作「獣類一覧」（明治六年）[33]においてジラフが「麒麟」と呼ばれたことである（〔図7〕）。

図7　「獣類一覧」

（田中芳男訳『博物図教授法』（明治十年））
（唐沢富太郎編集『明治初期教育稀覯書集成』17（雄松堂、1980）（影印本）より）

＊懸図の「獣類一覧」は動物がもっと多いが、麒麟が見やすいのでこれを載せる。

この図は多くの教科書にも引かれているが、学校で教材として壁に掛けて用いられたもので[34]、その影響力は大きかった。同図に見える名前は、ライオンが「シシ　獅子」、カンガルーが「ケンクリユ袋鼠」と書かれている以外、ほぼ現在の名称と同じである。日本でジラフがキリンと呼ばれることを決定づけたのはこの「獣類一覧」表であると言えよう。

なぜ田中は「麒麟」を選んだのか？

すでに述べたように、田中はジラフの訳として「麒麟」以外に「豹駝」や「長頸鹿」も載せており、絶対的に「麒麟」が適当だと考えていたわけではない。ただ、いずれも「麒麟」が冒頭に置かれており、小学懸図の「獣類一覧」でも「麒麟」を採用した。また、明治四年の『泰西訓蒙図解』では三つ並記されていた訳が、明治八年の『動物学　初編　哺乳類』下では「麒麟」「豹駝」だけになり[35]、徐々に絞られていっているように見える。それでは、田中はなぜ「麒麟」を第一候補としたのであろうか。

先に述べたように、田中芳男は明治初期の動物学の中心人物であり、本稿で紹介した先人の説はすべて知っていた。まず、田中が大槻玄沢『蘭畹摘芳』（写本）を見ていたことは、東京大学総合図書館田中芳男文庫に森立之・田中芳男旧蔵の写本（A90-1441）があることから確認できる。その他、『蘭畹摘芳』写本は、田中芳男が収拾に尽力した国立博物館蔵書にもある[36]。また、伊藤圭介『佛蘭西獣図訳名』については、伊藤が田中の師であるし、そもそも国会図書館にある『佛蘭西獣図訳名』が田中芳男による写本である（注25を参照されたい）。

それでは、先人の諸説を知っていた田中芳男が「麒麟」を採用したのはなぜか。東京大学総合図書館「田中芳男文庫」には田中芳男の大量の蔵書が残されている。田中芳男は、当時のパンフレット類も整理して残しており、当時の博物学の状況を知る上で貴重なコレクションとなっている。私は、その蔵書から田中がジラフの訳語について考察している資料を探したが見つからなかった。見つかったのは、田中がジラフを「麒麟」と呼んでいる実例だけである[37]。

田中芳男自身の言葉が見つからないので、以下、推測で述べるしかない。

田中芳男の「獣類一覧」は基本的に通称を採用しており[38]、今の日本人が見てもなじみ深い動物名が並んでいる。「豹駝」は欧文直訳調で、またそれはジラフをキメラ的に表現したもの（前述「幕末から明治期にかけてのジラフの訳語」を参照）で、動物学的に正確な表現でもない（諸動物の特徴を合成した点、かつての想像動物

「麒麟」に近い）。「長頸鹿」は当時の中国での造語である。これらの訳語や造語を使わなくても既存のものがあるならそれを採用するのは自然であろう。何より、「麒麟」はすでに日本人になじみがあり、また発音もしやすい。日本人になじみのある麒麟は当然、麒麟麦酒のような麒麟である[39]が、ライオンを指している獅子がかなりデフォルメされていることを考えると、ジラフと伝統的麒麟像との違いも許容範囲だと言えよう。

ジラフに先立ち、ゾウやラクダは江戸時代にすでに来日していた。当時の瓦版が田中芳男『博物帖』（東京大学総合図書館田中芳男文庫A00-6011）に残されている。それらに共通するのは、太平の世に現れた祥獣として称える点である[40]。最も背が高く、江戸時代にも来日していなかった奇獣中の奇獣であるジラフに、瑞獣の代表である麒麟（幸いにしてその名前は他の動物に取られていなかった）の名を当てるのは非常に自然なことだと言えよう。

さらに指摘しておきたいのは、江戸末期から明治初期、麒麟は実在する動物だと考えられていたらしいことである。『蘭畹摘芳』（写本）には、「康熙帝時出ルトイフ麟図、或人ノ所伝。出処未詳」と題して、角が丸い鹿のような画が載せられている（〔図8〕）。また、『博物館写生図』（国立博物館、和2374、マイクロフィルム一二三コマ目）（中に明治一六年の年号が見える）にも、部分的に鱗模様のある、鹿のような「麒麟図」が載せられている（〔図9〕）。「薩侯蔵図」とあり、賛によると、乾隆四年に牛が産んだもので、御覧に供されたそうだ。なお、この図は、文化十四年（一八一四）刊の大田南畝『南畝莠言』（『日本随筆大成』二―二四、吉川弘文館、二四五頁）にも見える（もともと元文四年（一七三九）に日本にもたら

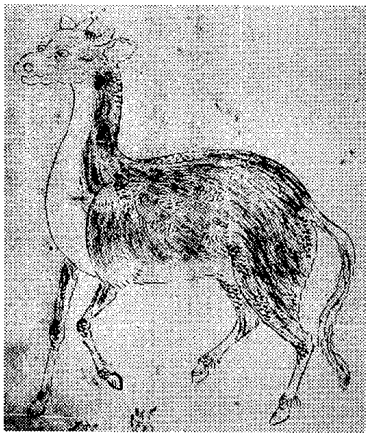

図8　康熙麒麟図
（国会図書館蔵『蘭畹摘芳』写本より）

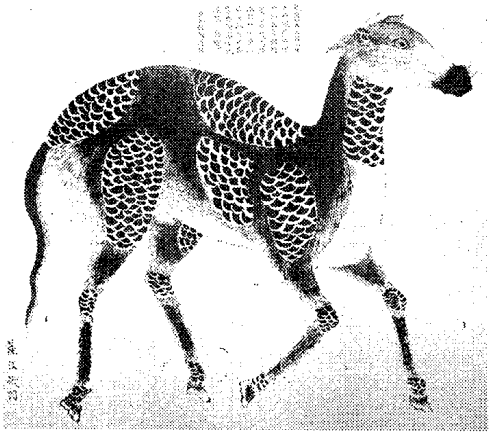

図9　乾隆麒麟図
（国立博物館蔵『博物館写生図』より）

＊両者の形が左右反対ながら似るのはあるいは転写の関係にあるか。

されたらしい)。これらによれば、康熙帝や乾隆帝の時代にも、珍しい鹿が麒麟として献上されたのだ(日本には意外な資料が残されているものだ)。それらを見た日本人が麒麟は実在する動物だと考えても不思議はない[41]。

またさらに指摘しておきたいのは、ジラフの命名に関する田中芳男の文章が見あたらないのは、その時代を反映したものであろうことである。命名を考察している時間もなく、その対象物を記述する段階へと事態は進んでいったのだ。そもそも、人々の関心は古の漢籍ではなく、当代の欧米へと向かい、漢籍を引用してその名前を考察するという風潮はもはや存在していなかったのであろう。桂川国瑞、大槻玄沢が博く漢籍を引用し綿密な考証を行っていたのに対し、田中芳男は近刊の中国書により訳語を拾うにとどまっている。そして、後でも述べるが、さらにジラフ来日時の石川千代松に至っては「アメリカ人の書いた漢書」というろ覚えで述べるにとどまっている。この「漢学の衰退」を目にして、漢文を研究対象にしてきた者としてはある感慨を感じずにはいられない[42]。さらに、漢字で「麒麟」と書かれることが多かったのが、徐々に「キリン」というカタカナ書きが主流となる。

結論を言えば、現在、ジラフをキリンと呼ぶのは直接的には田中芳男に由来する。どれほど確信を持っていたのかはわからないが、田中は麒麟をジラフの訳の第一候補とした。そして、彼によって小学校に掲げる「獣類一覧」表でその呼称が採用されたことは、一般大衆への定着に特に大きな役割を果たしたと考えられる。ただし、田中芳男の麒麟の採用は、自らが能動的に名付けたものというより、造語よりも従来親しまれた名前をつけるという傾向に沿ったものと言える。

博物学における「麒麟」の定着

以下、明治期のジラフの訳を概観してみたい。

島次三郎『博物教授法』(明治九年(一八七六)、再版一八八三年)には以下のようにある。

麒麟(キリン)ハ阿非利加ニ産ス。…原名ジラフ、一ニ長頸鹿(チャウケイロク)ト名ケ又タ豹駝(ヘウダ)ト訳ス。蓋シ未ダ普通一定ノ訳字アラズ。

「麒麟」「長頸鹿」「豹駝」の三説を挙げつつ、「麒麟」を冒頭に置いているのである。冒頭に麒麟を置くのは、同書に挙げる田中芳男「獣類一覧」表(「田中芳男撰、服部雪斎画、久保弘道校」)で、ジラフを「キリン　麒麟」と呼んでいるからであろう。だが、そも

そもこのように複数の訳名を挙げるのは例外で、明治期の動物学の教科書は、ほとんどすべてがジラフをキリン（麒麟）とだけ呼んでいる[43]。

言語学における「豹駝」という呼称

興味深いのは、動物学の教科書でジラフが「きりん（麒麟）」と呼ばれているのとは対照的に、明治期の英和辞典ではジラフはほとんど「豹駝」と呼ばれていることである[44]。キリンの学術名はGiraffa camelopardalisと言う。camelopardalisはラテン語だが、もともとペルシャ語でジラフが「ヒョウ・ラクダ」と呼ばれていたことに由来する。英和辞典で「豹駝」が採用されたのは、ラテン語源のジラフの学術名の忠実な訳になっているからであろう。

ここで、大槻文彦による国語辞典『大言海』を見てみよう[45]。『大言海』の「キリン」「豹駝」「ジラフ」の項にそれぞれ次のようにある。なお、同書は、明治四五年（一九一二）から編纂を始め、初版は一九三五年に完成し、冨山房から刊行された。

「キリン」「（二）今、じらふト云フ獣ヲ、麒麟ニ充ツルハ、妄ナリ。其条ヲ見ヨ。」（五〇九頁）

「豹駝（へうだ）」「〔色彩、斑文、豹ニ似、体躯、駱駝ニ似タレバ名トスト云フ〕麒麟ノ異名。じらふノ条ヲ見ヨ。」（一〇二二頁）

「ジラフ」「（＊湯城注：形状の説明の後に）麒麟。」（一八〇二頁）

以上を見ると、当時キリンという名称が一般的であったが、大槻文彦はジラフをキリンと呼ぶことに反対し、一方、名は体を表す「豹駝」は別名として認めていたことがわかる。ちなみに、大槻文彦は、ジラフ麒麟説を唱えた大槻玄沢の孫に当たる。祖父が唱えた説を孫が否定しているというのは興味深い事実であろう。

以上のように、大槻玄沢らが唱えたジラフ麒麟説は、精察を経ないまま田中芳男ら博物学者に使用されその名称が定着した。一方、「豹駝」という名称は、名は体を表すものとして言語学者からは支持を受けたが、一般に広まることはなかった。キリンという名称の確立は、既成事実ができあがったことによると言えるであろう[46]。

再び、石川千代松について―麒麟と政治と

二章冒頭で述べたように、ジラフの初来日時にジラフがキリンと呼ばれたことにより、当時の上野動物園館長石川千代松がキリンの名付け親のように言われている。だが、私の調査に拠る限り、石川はキリンという名称を積極的に推奨していたわけではない。以下、『石川千代松全集』から、ジラフに関する記述を抜き出してみよう。

まず、「通俗動物講話」（興文社、一九三六）では、石川はジラフという呼称を使っている[47]。

また、「動物絵物語」（興文社、一九三六）第二篇「動物園」（『石川千代松全集』二）には、様々な動物の名称が見える。それらは、「黒猩々」「象」「犀」などの漢字名と、「ゴリラ」「オランウータン」などの外来名、「キツネ」「ウサギ」「ラクダ」「カバ」など和語、漢語があるものでもカナで表されているものとが混じり合っている。そして、ジラフはカナで「キリン」とあり、以下のように説明する（二一一頁）。

これはジラフといふ動物です。キリンと名をつけるのは、あるいは当らないかも知れませんが、あるアメリカ人の書いた漢書にも、さう書いてあつたやうに覚えてゐます。いづれにしても、このジラフをキリンとして日本で初めて見たのは明治四十年頃のことで、私がハーゲンベックから、上野動物園に求めて来たものです。

また、二一二頁の口絵には、「麒麟といつてゐるアフリカ産ジラフ」という但し書きがある。

以上からすると、石川千代松は「キリン」という呼び名が正しい名称であると提唱した訳ではない。むしろ、正式名称としてはジラフを考えていたようだ。石川がジラフをキリンと呼んだのは、それが適切な名称だと考えたからではなく、当時それが一般的になっていたからであろう。麒麟の語の出拠も「アメリカ人の書いた漢書」（先に述べた『博物新編』のことか）というはなはだ曖昧な言い方をするだけで、踏み込んで考察することはしていない。石川は、通称は呼びやすければよいとして、厳密な名物一致を追求しなかったのであろう。

また、ローレンツ・ハーゲンベック著、北垣あつし訳「動物はわが生命」（『動物文学』所収）には「日本人にはなじみがないので中国の神獣キリンの名をこのジラフにつけた」とある[48]。これによると、キリンという命名は、神獣麒麟と関係するのであろうか。この点に関する資料として、石川千代松「麒麟の話」がある。この文章は、ジラフ来日時の明治四〇年に出版された『動物学叢話』（博文館〈学芸叢書四〉）に収録されている。来日したジラフの生態を説

明する目的で書かれた文章であるが、同時に聖獣麒麟と結びつけた記述が見られる。例えば、冒頭部は「麒麟は聖獣」という小見出しが付けられ、麒麟は聖人の世に出ると説明した後に、以下のように言う。

> 其の明治の御世でしかも古今未曾有の戦勝の後に来たのも本統（ママ）であるから先づ吾々は目出度事であると思っても差し支へはないと、断言する。

そして、末尾ではジラフの数が減っているのは、世の末になっているせいであろうかと締めくくる。石川自身は、麒麟とジラフは関係するものと考えていなかったであろうが、日露戦争の勝利を祝うものとして麒麟という名称はふさわしいと考えていたことが窺えよう。国を頌えるという点で、意外にも明代の中国と共通点があるのである。

ちなみに、日清戦争後の一八九五年には、戦利品動物が献上されている[49]。また、状況は正反対であるが、一九七二年には日中国交回復を記念してパンダが贈られた。政治と動物園とは密接に結びついている。

日本人の命名の特徴

最後に日本での命名（名物学）の特徴について触れておきたい。

今、日本人は、外来語かどうかに関わらず、動物名や植物名はカタカナで表している。客観的対象物として表記するためである。そして、これは明治以前、日本人は、すでに、本草学において行っている。江戸時代の本草学では、漢字名に対してどの和名を当てるかが問題とされた[50]。そしてその和名はカタカナで表記されていた。その場合、当然、漢字名が主で、和名は言うまでもなく仮称（通称）である（カナが仮の文字というのは平安時代だけではない）。

明治以降、日本人は江戸時代の伝統を受け継ぎ動物名をカナで呼ぶことで、和語、漢語、外来語（欧米語）の区別をなくし、客観的対象物たることを表現できるようになった。ただ、そのために、名付けに対する無頓着さが生じたのも否定できまい。だが、それは通称であるがゆえに、こだわる必要もなかったのだ。

「キリン」が定着したのも、何より田中の「獣類一覧」表や動物園でそう呼ばれ、既成事実ができあがったことが大きいのであろう。専門家である石川千代松にとっても、通称はどうでもよかったのだ。それは石川の呼ぶ動物名が、和語、漢語、欧米外来語など様々入り

混じっていることからもわかる（南方音に由来する北京（ペキン）、北方音に由来する上海（シャンハイ）、日本漢字音で読む武漢（ブカン）などそれぞれ来源を異にするように）。だが、一方、意匠や「麒麟児」という言葉を見ればわかるように、伝説上の瑞獣「麒麟」は現代日本でもなお命脈を保っている。瑞獣の「麒麟」とジラフの「キリン」とが併存することにより、「はじめに」で述べたような疑問を生じることになったのだ。

今、キリンやゾウやカバに漢字が当てはまること（ある意味を有していること）を意識している人はどれだけいるだろう。カタカナによる名称表記は、対象物を客観視できるという利点もあったが、一方、名称に対する考察をなおざりにする結果も招いた。これは動物に限らず、すべての名称についてもそうであろう。そして、「名」（ことば）の軽視は、それを重んじる文化の人たちとは摩擦の原因にもなりえることは重々認識すべきであろう。

おわりに

中国では、ある動物を聖獣麒麟と認めるかどうかは皇帝権力による国家問題であり、ジラフが麒麟とされたのは明代に限定された一時的な社会現象であった。そのため、その後は消え去った。一方、明治以降の日本では、前例主義的に命名が行われ、一旦付いた名前は既成事実として定着することになった。ジラフと麒麟の関係を指摘した江戸時代の蘭学者たちは膨大な漢籍を読んでいたが、明治以降はそのような漢籍について精察は見られない。

以上のような日本人の命名の特徴は、日本人の曖昧さ、いい加減さを表すものとも言えよう。だが、このような曖昧さは、名称よりもその中味を重んじる実学的思考と臨機応変さの表れとして評価もできよう。また、逆説的ではあるが、このような日本の曖昧さにより、かえって古いものを保存できることにもなった。中国では新しいものが出ると古いものが捨て去られたのに対し、日本では古いものがよく保存された。別の言い方をすれば、中国ではその時々に標準が定められたのに対し、日本ではそういう認定はされなかった。ジラフに対する麒麟という名称が日本で残ったのも、そのような現象の一例と言えるかも知れない。

注

1　おおよそ明代以降のイメージである。それ以前には実はいろいろな麒麟像がある（曽布川寛「麒麟図像学」（江上波夫監修『夢万年―聖獣伝説』講談社、一九八八にまとめられている）。そして、麒麟の起源説も、鹿、馬、牛、ジラフ、ファブリック

シンボルとしての一角の具象化など様々ある。これらについては稿を改めて論じたい。

2　名物学については、青木正児『中華名物考』（平凡社〈東洋文庫〉、一九八八、初版は春秋社、一九五九）、西村三郎『文明のなかの博物学　西欧と日本』上（紀伊國屋書店、一九九九）一一〇頁を参照されたい。

3　『明史』において、ジラフが麒麟として献上されている例には以下のようなものがある。巻三〇四「列伝、宦官」＊鄭和伝がある巻「（成祖）十三年七月、帝欲通榜葛剌（ベンガル）諸国…其王賽仏丁遣貢麒麟及諸方物。帝大悦、錫予有加。」（その後、沼納樸児に攻められた時、明に助けを求め、明が説得に当たったことを載せる）。その他、巻七（成祖三）、巻九（宣宗）、巻十（英宗前紀）、巻三二六（外国七）、巻三二六（外国七）巻三三二（西域四）に見える。

4　「婁東劉家港天妃宮石刻通番事蹟記」（『呉都文粋続集』巻二八「道観」）に「阿丹国進麒麟、番名祖剌法」とある。

5　ラウファー『キリン伝来考』に紹介する西洋人の説、及び、章鴻釗（しょうこうしょう）『三霊解』「麒麟解」。日本人の著作では、阿部余四男『動物閑談』（三省堂、一九四二）三〇頁に見える（荒俣宏『世界大博物図鑑五　哺乳類』（平凡社、一九八八）三一一頁に触れる）。

6　『明史』輿服志には「外蕃冠服」として永楽年間に琉球王に「麟袍」を賜ったとある。その他、巻一九六「列伝、夏言」、巻二五九「列伝、熊廷弼」、巻三一〇「列伝、土司」、巻三一二「列伝、四川土司二」「播州宣慰司」、巻三二三「列伝、外国四」「古麻剌朗」、巻三二五「列伝、外国六」「満剌加（マラッカ）」に見える。

7　宮下三郎「麒麟とキリン」（『知の考古学』一一号、一九七七）に見える。

8　王充『論衡』「講瑞篇」「周獲麟、麟以麞而角、武帝之麟、亦如麞而角。」（また、『論衡』においては、「麒麟」と馬偏の「騏驥」とが互換性を持っている）。郭樸『爾雅』注には以下のように見える。〔『爾雅』本文〕「麋、大麃、牛尾、一角」。〔郭樸注〕「漢武帝郊雍、得一角獣、若麃然、謂之麟者、此是也」。〔『爾雅』本文〕「麞、麕身、牛尾、一角」。〔郭樸注〕「角頭有肉、『公羊伝』曰「有麕而角」」。〔『爾雅』本文〕「驌、如馬、一角、不角者麒」。〔郭樸注〕「元康八年、九真郡猟得一獣。大如馬、一角、角如鹿茸、此即驌也。今深山山中人時或見之。亦有無角者」。

9　代表例として以下のような例がある。「是月、鳳皇六、青龍三、

白龍二、麒麟各一、見于郡国」（『晋書』三「武帝本紀」）。

10 『宋史』巻二二「本紀、徽宗四」「（宣和三年）癸巳、汝州牛生麒麟」の他、巻六七「五行志、五行五、土」に「牛生麒麟」という文句が四例見える。『元史』では、巻二四「本紀、仁宗一」、巻四二「本紀四二、順帝五」、巻五〇「五行一」に見える。

11 ベトナムから犀が献じられたことは、宋・沈括『夢渓筆談』巻二一「異事」「交趾献麟」に見える。司馬光の論は「交趾献奇獣賦」（『温国文正公文集』巻一）に見える。

12 『増広司馬温公全集』巻二九冒頭には「進交趾献奇獣賦表　嘉祐三年八月」と（内閣文庫本：汲古書院影印本による）「交趾献奇獣賦」とがある。前者は、司馬光自身が自分の意見を述べる形式だが、後者では、皇帝自らが述べる形式になっている。

前者では、「儻其真也、則非自然而来。設其偽也、徒為遠夷所笑。殆非所以発揚聖朝之光輝、補益治平之実効也」と言った後に、『書経』「旅獒篇」の「不作無益害有益、功乃成。…犬馬非其土性不畜、珍禽奇獣不育于国…」という文句を引用し、「臣竊以為宜延見使者、賚之金帛、賜以詔書、嘉答其意、帰其麒麟、使復故壌、然後登俊傑之才、修政治之実、使家給人足、礼興楽行、四夷賓服、天瑞自至、以遵旅獒之意、不亦盛乎」と提案する。

後者では、異獣が麒麟として献上されたことを頌える臣を皇帝がいさめ、その言葉に感動した臣下諸共に政治に勉め、比類無き太平の世が実現されたという内容になっている。言わば、予言版で皇帝を頌えるという凝った形式になっている。その末尾に言う。

由是観之、則彼遠夷之凡禽、瘴海之怪獣、皮不足以備車甲、肉不足以登俎豆。又何足以耗水衡之芻而汚百里之囿者哉。」＊水衡は天子の庭園を司る官。

これは動物園で奇獣を見て馬鹿騒ぎする現代人、パンダやジラフを外交カードに使う現代政治家に対しても当てはまる批判であろう。また、『書経』「旅獒篇」によるものとは言え、その動物愛護的観点も注目すべきであろう。

13 有名なものでは、「麒麟図」（『故宮書画図録』（九）、国立故宮博物院（台北）、一九九二、三四六頁）に附された沈度作「瑞応麒麟頌有序」がある。その他、筆者の調査によるだけでも以下のように多数存在する。王洪「瑞応麒麟賦」（『毅齋集』巻一「賦」）、金幼孜「瑞応麒麟賦」（『金文靖集』巻六「賦賛頌」）、王直「瑞応麒麟賦」（『抑庵文後集』巻三五「賦」）、李時勉「麒麟賦」（『古廉文集』巻一）、「瑞応麒麟賦」（『両谿文集』巻三）、夏原吉「麒麟賦」、劉定之「麒麟賦」（以上二編『御定歴代賦彙』

巻一三四所収）。

14　中国はアフリカに多大の援助を行っている。一方、遅まきながら、日本も、小泉総理大臣が、二〇〇六年四月から五月にかけて、野口英世賞の設立などの援助項目を携えて、エチオピア及びガーナを訪問し、常任理事国入り支持を訴えた。

15　当時の館長石川千代松がドイツのハーゲンベックから二頭のジラフを購入した。ゾウやラクダなどはすでに江戸時代から来日していたのに比べ、このジラフの来日は非常に遅かった。ジラフが大型で神経質な動物だったからである。そしてこのジラフの登場により上野動物園の入園者数は増加し、年間百万人を突破した。だが、二頭とも翌年に死亡し、入園者数は半減したとされる（恩賜上野動物園編『上野動物園百年史』第一法規、一二八二、七二頁～、『上野動物園のあゆみ　開園一二〇周年記念一八八二―二〇〇二』東京都恩賜上野動物園、二〇〇三、二〇六頁、『石川千代松全集』二「動物絵物語」興文社、一九三六、第二篇「動物園」）。なお、江戸時代の珍獣の渡来については、磯野直秀「海を越えてきた鳥獣たち」（山田慶児編『物のイメージ・本草と博物学への招待』朝日新聞社、一九九四）、西村三郎『文明のなかの博物学　西欧と日本』上（紀伊國屋書店、一九九九）一八一頁、梶島孝雄『資料日本動物史』（八坂書房、一九九七）、『日本博物学事始―描かれた自然Ⅰ』（サントリー美術館、一九八七）などを参照されたい。

高橋峯吉『動物たちと五十年』（実業之日本社、一九五七）「キリン」には、動物園に勤務した人の目から見たジラフ来日時の様子が生き生きと描かれている。筆者は「伝説にある麒麟とは似ても似つかぬおとなしそうな顔に、ちょっと意外な気がした」と言う（同書三六頁）。その他、移動の際の沿道の騒ぎなども生き生きと描かれている。

16　『上野動物園百年史』七四頁、『上野動物園百年史　資料編』二九〇頁、五七九頁。

17　高島春雄『動物渡来物語』（学風書院、一九五五）では、「ジラフ（麒麟）」の項に、石川千代松が名付けたと言う。この説は、荒俣宏『世界大博物図鑑五　哺乳類』（平凡社、一九八八）でも引かれている（三一一頁、三四三頁）。他、二〇〇六年現在、インターネットで検索すると、この説が広まっていることを確認できる。

18　梶島孝雄『資料日本動物史』（八坂書房、一九九七）一〇二頁に、「恐らくこれが我が国でジラフを紹介した最初の絵画ではあるまいか」と言う。ただし、正確に言えば同図は転写図であり、桂川国瑞の原画ではない。同図は、国会図書館蔵『動物写

生図』（特1-3273、一軸、一一図）の中に見える。目録では桂川国瑞写とされているが、ある図に「天保…」、末尾「弘化三年（一八四六）丙午年十一月四日　調之」とあることから、後世の写であると考えられる（磯野直秀先生ご教示）。原画は、『日本博物学事始—描かれた自然I』（サントリー美術館、一九八七）六七頁に見える「一〇一　麒麟図」だと思われる（おそらく個人蔵）。

19 『瀛涯勝覧』については、小川博編『中国人の南方見聞録　瀛涯勝覧』（吉川弘文館、一九九八）を参照されたい。

20 「西狩所獲」は『春秋』末尾「哀公一四年」に見える。「元和所献」は、『旧唐書』巻一五「憲宗下」「（元和七年十一月）東川観察使潘孟陽奏龍州武安県嘉禾生、有麟食之。麟之来、群鹿環之、光彩不可正視。使画工図之以献」のことか。あるいは、『路史』「餘論」巻五「麟難」に「章帝何人而元和二三年間郊国上麟者五十一」とある後漢のことか。『後漢書』巻三「章帝紀」には「章和元年…朕以不徳、受祖宗弘烈、乃者鳳皇仍集、麒麟並臻、…今改元和四年為章和元年」とあり、元和年間に麒麟の出現があったようだが、「五十一」という具体的内容は見えない。なお、末尾の「印度鶏」とは、印度産の鳥が鳳凰であろうと推測することを言うのであろう（後述参照）。

21 宮下三郎「麒麟とキリン」（『知の考古学』一一号、一九七七）で紹介されている。『蘭畹摘芳』（写本）は東京の国立博物館および内閣文庫に所蔵されている（後者は、旧蒹葭堂蔵書）。その他、大阪の武田科学振興財団杏雨書屋にも写本がある（「杏491」）が国立博物館本の写本である。冒頭に「豊間　蓮沼清緝筆録、土浦　山村昌永校訂」とある。

22 ヨンストン（一六〇三—七五）については、西村三郎『文明の中の博物学　西欧と日本』上（紀伊國屋書店、一九九九）三一七頁に詳しい。彼の『禽獣魚介蟲図譜』（一六六〇刊）はオランダ東インド会社の船で我が国に将来され、徳川幕府に献上され、『阿蘭陀禽獣虫魚図』『阿蘭陀禽獣譜』の名で広く知られた（木村陽二郎監修『ヨンストン『動物図説』図版集成』科学書院〈図像学叢書一〉、一九九三に影印がある（他、『日本博物学事始—描かれた自然I』六七頁にもヨンストンのジラフ図が見える）。ジラフはかなり胴長、短足に描かれている。なお、ヨンストン書の抄訳である野呂元丈『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』（一七四一）にはジラフは見えない（同書は、内閣文庫蔵、木村陽二郎監修『ヨンストン『動物図説』図版集成』にも影印がある）。

23 塚本靖「麒麟考」（『考古学雑誌』第一巻第十号、通編第一五一

号、一九一一）は異色の論文である。工学者である作者が、麒麟を考証した結果、装飾として麒麟を使う場合には、（麒麟麦酒のような）いかめしい麒麟像ではなく、古図に見える仁獣本来の姿を取り戻すべきだという。この論文は、既存の麒麟像を否定する点で、大槻玄沢の論にスタンスが似ている。

24　日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、一九八四）七六六頁「簡単な単語集として広く使用され、版も多い」。「この形式にならった単語集は、蘭語に限らず、この後も多く出され、後に与えた影響は大きい」。なお、杉本つとむ編著『蛮語箋』（皓星社、二〇〇〇）で影印されている。なお、桂川甫周国興（くにおき）『和蘭字彙』安政二～五（一八五五―一八五八）にはジラフは見えない。

25　同書は、佐々木時雄『動物園の歴史―日本における動物園の成立』（西田書店、一九七五）四一頁に紹介されている。文久三年（一八六三）田中芳男写本が国会図書館にある（特7-484）。

26　『地球説略』（一八五六年、箕作阮甫訓点本は万延元年（一八六〇）刊）は、アメリカ出身の宣教師褘理哲（ウェイ Richard Quarterman Way（一八一九―一八九五））著の世界地理入門書で広く流布した。同書の「亜非利加大洲図説」「努皮亜国（＊現エチオピア沿岸部）図説」には次のようにある（八一葉表）。

所産土産…又有奇獣一。毛文似豹、身体似駝、頭甚長。其高統約有一丈餘、故名曰豹駝。（一八五六年、寧波出版（中之島図書館蔵本）による）。

『博物新編』（一八五一）は、イギリス人合信（ホブソン Benjamin Hobson（一八一六―一八七三））著の博物学入門書である。同書も日本で多くの訳注が作られ流行した。同書の巻四「鳥獣略論」「駱駝論」には駱駝類の一種としてジラフの絵が描かれており、その絵の横に「之猟猟　中国無名」とある（（図10））。

27　田中の経歴については『田中芳男君七六展覧会記念誌』（大日本山林会編、大正二年）の「経歴談」と『田中芳男氏功績書』（小泉三男松撰、大正三年）が詳しい（西野嘉章・根本亮子

図10　『博物新編』
（大阪大学図書館懐徳堂文庫蔵 明治4年鹿児島県刊行本より）

「田中文庫博覧会関連資料目録」（東京大学創立百二十周年記念東京大学展「学問の過去・現在・未来」「第一部　学問のアルケオロジー」「第一章　混沌の時代―開成所と物産会」「物産学の確立」）による）。他、みやじましげる編著『田中芳男伝―なんじゃあもんじゃあ』（田中芳男・義廉顕彰会、一九八三）（大空社、二〇〇〇）、村沢武夫『近代日本を築いた田中芳男と義兼』（田中芳男・義兼顕彰会、一九七八）、略伝が、湯本豪一編『図説　明治人物事典　文化人・学者・実業家』（日外アソシエーツ、二〇〇〇）三一一～三一三頁にある。その他、田中義信「田中芳男―その生涯と著作」（『洋学』、二〇〇〇）は上述各書に見える田中芳男に関する誤解を正している。

28 宮下三郎「麒麟とキリン―本草の分類」による。みやじましげる『田中芳男伝―なんじゃあもんじゃあ』八〇頁（フィラデルフィア博覧会に関する記述）「田中芳男は、なんとか日本にも動物園をつくりたいと考えていたので、とりあえず剥製でもがまんしてと「麒麟（キリン）獅子（ライオン）虎（タイガー）白熊の剥製標本を買い求め日本に送った（＊「　」はママ）。日本に到着した日は不明だが、明治十年九月二十日から六十日間博物館で一般公開した。上野の動物園のさきがい（＊ママ）であってパンダのようにたいへんな人気だったとのことである」。三七七頁「動物の剥製を求めて来て一般に公開し、動物園についての説明を行い、動物園つくりのピーアールを行う」。この記述によれば当時すでに「キリン」と呼ばれていたのであろう。なお、内閣文庫蔵『米国博覧会物品区分目録』には、展示品が列挙されている。ここにはジラフは取り上げられていない。また、剥製は「充実ノ獣皮」「所謂剥製品（マルムキ）」と言い、いまだ名称が確定していなかったことが窺える。

第十六中区

動物ノ生活スルモノ

第百六十五小区

一　野獣○諸国ノ生野獣、西方諸州諸領ヨリ来ル麋（オホジカ）、鹿、羚羊、水牛、熊、狼、山猫其他諸獣及ビ充実ノ獣皮（死獣ノ形体ヲ保全スルタメニ満ス事所謂剥製品（マルムキ））。

29 『泰西訓蒙図解』については、みやじましげる編著『田中芳男伝―なんじゃあもんじゃあ』七〇頁を参照のこと。同書三一一頁以下に影印がある。

30 沈国威・内田慶市編著『近代啓蒙の足跡―東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙』の研究』（関西大学出版部〈関西大学東西学術研究書研究叢刊一九〉、二〇〇二）が詳しい。「長頸鹿」は「第四十七課　野獣論」に「長頸鹿、身高且馴」と見える。

31　『斯魯斯動物学　田中芳男動物学』（恒和出版〈江戸科学古典叢書二四〉、一九八二）が出版されている。

32　『斯魯斯動物学　田中芳男動物学』（恒和出版〈江戸科学古典叢書二四〉、一九八二）による。

33　『田中芳男伝―なんじゃあもんじゃあ』によると、明治五年に着手している（三七一頁）。西村三郎『文明のなかの博物学―西欧と日本（下）』五二〇頁にも教育用掛図の成立状況が述べられている。同書によると、博物掛図の刊行は明治六年（一八七三）に始まり明治一一年（一八七八）に完成した。なお、国立公文書館内閣文庫、東書文庫に色刷りのものが保存されている。内閣文庫のものは、縦約八〇センチ、横約六〇センチの巻物で、素朴な彩色が施されている。

34　掛図を使って教育している様子は、西村三郎『文明のなかの博物学―西欧と日本（下）』五二五頁に見える。ちなみに、田中芳男の弟田中義廉も師範学校の創建者で、明治期に全国の小学校で使用された小学読本の編纂者の一人でもあった。

35　さらに、もし、すでに述べたように『動物学　初編　哺乳類』の「豹駝」の出典が田中の間違いだとすると、豹駝への関心の希薄さを物語るものと言えよう。

36　写本『蘭畹摘芳』については磯野直秀「筆録本『蘭畹摘芳』」（『慶應義塾大学日吉紀要（自然科学）』一七、一九九五）が詳しい。

37　例えば、明治八年筆のヂュボア氏『動物訓蒙』の訳出「麒麟之説抜訳」（『物産雑説』「獣類一」）では、ジラフのことを「麒麟」としている。また、明治一一年の新聞への連載「博物学の略解」（『内外教育新報』明治一一年三月十八日、第十二号「学問ノ話」欄）でも、「麒麟」と呼んでいる（『物産宝庫』甲三「動物雑部」二六三にも見える）。田中芳男における「麒麟」の定着は相当早い。

38　櫻井豪人「開成所の訳語と田中芳男―テンジクネズミ（モルモット）の訳語を手がかりに」（京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』七一―四、二〇〇二）も、「多くの場合、『歴階』のような英華辞典類の表記に従わず、それ以前から日本人が親しんでいる漢字表記のある場合にはそちらを採用し、どうしても適切な漢字表記が見つからない場合にのみ『歴階』等に見られるような近代中国語に由来する漢字表記を用いているようである」（一三頁）と言う。

39　日本の伝統的意匠としての麒麟については、江上波夫監修『夢万年―聖獣伝説』にまとめられている。

40　ゾウの来日を載せる「天竺舶来大象之写真」（浮世絵、享保十

四年五月二十五日）には「…誠ニ聖代の異獣と称すべきなり」とある。文久三年弥生上旬のラクダ来日興行を伝えた瓦版（龍斎芳豊画）には「神洲の武威四夷に轟き聖代の徳沢八蛮ニ溢れ海外万里の波濤を凌ぎ、招かざるに異邦の奇品膝下ニ入貢するをもて未見の万物日夜を選ばず時々刻々に舶来せり。その中に…。…実に泰平の祥獣といふべきのみ」とある。また、同じラクダを伝えた別の瓦版では、ラクダは悪魔除けであると言い、「彼の堯の代にあらわれし麟に等しき異獣なれば四方（よも）の君子競ふて御高駕の上御見物の…」と描写する。

41 その他、田中芳男『博物帖』（東京大学総合図書館田中芳男文庫A00-6011）に、明治初期の木版刷りだと思われる麒麟来日の図および記事が見え（「飯島冨五郎」と刻されている）、鹿のような麒麟が描かれている。

42 古田島洋介「日本漢詩文の衰亡曲線―漢詩文の伝統はいつ滅びたのか？」（『東アジア比較文化研究』五、東アジア比較文化国際会議日本支部、二〇〇六）の実例の一つとして挙げられるかもしれない。

43 国会図書館ホームページで公開されている近代ライブラリーを中心に調べた結果は以下のようである。

ブロムメ著、田中芳男抄訳、中島仰山画『動物学』（明治七年）「麒麟」、田中芳男選、中島仰山画『動物訓蒙　初編　哺乳類』（明治八年）「麒麟」、小野職愨（もとよし）、田中芳男著、長谷川竹葉画『小学用博物図』（明治九年）「キリン（麒麟）」、田中芳男編、久保弘道校、服部雪斎画『博物図　鳥獣之部』（明治一〇年）「キリン（麒麟）」、遠藤省吾編、田中芳男閲『小学博物問答』（明治一〇年）「麒麟」、平坂閲『訓蒙動物学』（明治一四年）「麒麟」、中川栄吉『訓蒙動物学字解』（明治一四年）「麒麟」、村田忠恕『小学博物書』（明治一五年）「麒麟」、練木喜三、滝田鐘四郎『応用動物学一』（明治一六年）「麒麟」、飯島魁『動物学教科書二』（明治二三年）「麒麟」、『新編動物学教科書』（明治三一年）「きりん（麒麟）」、丘浅治郎『近世動物学教科書』（明治三二年）「きりん」、秋山蓮三『哺乳動物』（明治三六年）「麒麟」。永峰秀樹『博物小学』巻一「動物学之部」（明治一五年）「ジラフ」は例外と言える。その他、博物学教科書では、須川賢久訳、田中芳男閲『具氏博物学』（序：明治八年、巻六：明治一〇年、「獣類一覧」：明治六年）巻六「麒麟（カメロパルド）即之拉啡」、田中芳男訳、小野職愨編、阿倍為任解『博物学教授法』（明治一〇年）「麒麟」、松川半山『画引博物図註解』（明治九年）「麒麟（一名ギラベ）」、平沢金之助『博物学教科書』（明治二八年）「麒麟」。

44 国会図書館ホームページで公開されている近代ライブラリーで調べた結果は以下のようである。

堀達之助『英和対訳袖珍辞書』（明治二年）「豹駝」、高橋新吉等編『和訳英辞書』（明治二年）「豹駝」、荒井郁之助『英和対訳辞書』（明治五年）「豹駝」、柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』（明治六年）「豹駝」、鹿田等編『広益英倭字典』（明治七年）「豹駝」、尺振八訳『明治英和字典二』（明治一七年）「麒麟」、前田訳『英和対訳大辞彙』（明治一八年）「豹駝」、岩貞謙吉編訳『明治大成英和対訳字彙』（明治一八年）「豹駝」、柴田昌吉・子安峻訳述『英和字彙』（明治一九年）「豹駝」、井波他次郎編訳『新撰英和字典』（明治一九年）「豹駝、麒麟」、岩貞謙吉編訳『新訳英和字彙』（明治二一年）「豹駝」、中沢澄男等編『英和辞典』（明治三〇年）「麒麟、豹駝」。なお、津田仙〔ほか〕訳，中村敬宇校正『英華和訳字典』（明治一二年）だけが「陀拉哑獣、ジラフィ（獣名）」と言う。なお、上記の堀達之助『英和対訳袖珍辞書』は、初版（文久二年、一八六二）では「獣ノ名」とだけある（杉本つとむ『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部、一九八一に影印あり）。その他、柳沢信大校正訓点『英華字彙』（明治二年）（ゆまに書房〈近代日本英学資料一〉）では「鹿豹」、羅布存徳著、井上哲治郎訂増『英華字典』では「吃哑啡獣」とある。

45 『キリン伝来考』一三四頁、福屋正修訳注では、日本で「豹駝」と呼ばれている実例として、大槻文彦『大言海』と島次三郎『博物教授法』とを挙げている。

46 宮下三郎「麒麟とキリン―本草の分類」は短編ながら貴重な情報が多い好論文であり、本稿は多大の啓発を受けた。ただし、筆者が、麒麟の例を「日本では同定が関心の中心」「中国では新しいものがはいってくると、まず命名が問題になり、次いで分類上の位置が与えられるという経過をたどる」という一般的特徴に結びつけようとするのには納得できない。

47 「何故寒い時には縮かまりますか」（『石川千代松全集』五、一九四頁、大正六年十月発行「少年科学」に初出）。

48 実吉達郎『中国妖怪人物事典』（講談社、一九九六）「麒麟」の項からの孫引き。残念ながら『動物文学』は未確認。

49 『上野動物園百年史』五三頁。『上野動物園のあゆみ　開園一二〇周年記念一八八二―二〇〇二』四頁。

50 日本の博物学は『本草綱目』に漢字で書かれた植物動物名の和名を探る方法で発達した（磯野直秀『描かれた動物・植物―江戸時代の博物誌　国立国会図書館特別展示』（国立国会図書館、二〇〇五）。

謝辞

本稿執筆にあたり、大阪府立大学の大形徹先生には多くの刺激とご教示とをいただいた。また、日本に関する内容については、慶應義塾大学名誉教授磯野直秀先生に一方ならぬご教示、情報を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。